

TOKYOみどりマガジン

特集3

東京の学校のみどりを楽しむ!

特集4

東京のみどりの活用と創出

Vol.2



イラスト：タニダアヤ作

『TOKYO EARTH WORKERS collection 2013 クリエイティブ コンテスト・アート部門』準グランプリ 受賞作品

みどり東京・温暖化防止プロジェクト



【巻頭インタビュー】

三島次郎さん

「自然が好き！
と言え、人が
増えるように」

三島次郎 (みしま・じろう)

筑波大学教授、桜美林大学教授を経て、同大学名誉教授。専門は生態学、環境科学、自然教育。第8次、第10次の南極観測隊員の経験も持つ。主な著書に『トマトはなぜ赤い——生態学入門』（東洋館出版社）、『生物誌からのエコロジー』『街角のエコロジー』（ともに玉川大学出版部）。

すらっと背の高い三島次郎先生は、世界のエコロジーをリードした一人、E・P・オダム博士のもとで学んだ生粋のエコロジストです。日本ではまだほとんどの人が「エコロジー」という言葉を知らない時代に、オダム博士のいるジョージア大学で学位を取り、日本に学問としてのエコロジー（生態学）を紹介した一人でもあります。

三島先生は大学で教鞭を執る一方、エコロジカルなものの方や考え方を、本や講演活動を通じて、一般の人にもわかりやすく伝える活動が続けてきました。そんな先生がおすすめする、簡単にできてエコロジーが身につく楽しい習慣があるそうです。

私の梅

「自分の家の庭でなくてもいいので、いつも通る街角や公園に梅の木があったら『私の梅、こんにちは』と声をかけてみましょう。そうすると、梅の木と自分とのつながりがぐっと深くなります。あ、まだ花が開かないとか、去年はよく咲いたけど今年はどうしたのかななど、相手の様子もよくわかるようになります。そうすると『私の梅』が私たちと自然との距離を縮めてくれるのです」

そして梅の香りが、訪れた春

の喜びを教えてくれるのですね。『もちろん『私の松』でも、『私の杉』でもかまわないのです。

他の植物や動物ですと、名前が気になってくるでしょ。花が咲いたら、この植物なんていう名前なんだろうと気になってくる。タンポポにも種類があつて、それがカントウタンポポなのか、セイヨウタンポポかが気になってきます。だんだん付き合っていくようになって、相手のことをよく知りたくなってくる。名前を知ること、自然との距離を縮めてくれることにつながります。

正しい名前を知るといのは大切なことですが、好きな名前をつけてもいいんです。『黄色い花』『ウチのスマイル』などなんでもいい。そして、他と違う点をよく見ておきましょう。やがてそれが、本当の名前と付き合っていくことになるのです」

自然が好きですか？

自然とのよりよい関係を保つためには、人と人とのよい関係を考える場合と同じように、自然という相手をよく知る必要があると三島先生は言います。

「どうしても人間が好きな自然だけが大切にされるくらいがあります。たとえば、都会の公園の片隅に生えたタンポポや舗装道路のわずかな割れ目の土に根

を下ろしたハコベ。雑草と呼ばれて抜き取られたり、踏みつけられたり、除草剤がまかれてしまいがちです。でも、それぞれが懸命に生きようとしている。タンポポは毎年たくさん綿毛の付いたタネを飛ばしますが、いったい何粒が新しい場所に無事に根を下ろし、芽を出せるでしょうか。土を失った都会で、それは気の遠くなるような小さな確率でしかないはずですが、確かにそれを知ってしまうと、簡単に草が抜けなくなりますね。「公園では掃き清められる落ち葉も、森では肥料になり、土壌の保水などに役立ちます。嫌われることの多い虫も、鳥たちの食物となります。人間に直接害を及ぼす虫はごくわずか。一種類の虫が生きているためには、餌や翅を休める場所が必要だけでなく、特定の虫が増えすぎないようにする生き物同士のつながりも重要です。だからこそ、豊かな自然が成り立っているのです。そういった、自然の法則性の理解、生態学の知識が、自然を知る上で不可欠なのです」

一匹の虫が生きているためにも、多くの条件が整っていないといけないのですね。

「目の前に蛾が飛んできたら、その背後に豊かな自然の影を見てほしい。夜の外灯に一匹の蛾も集まらなくなったとき、それ

は滅びゆく自然が発している赤信号と感じてください。虫を怖がらずに仲良くしてあげてください。本当に怖いものは何かを考えることにも挑戦してほしいですね」

声なき声に耳を傾ける

三島先生は、自然の生き物、あるいは声なき存在の視点で考え、その代弁者として発言することを意識しているそうですね。「声なき声を聴くという姿勢がないと、地球全体というシステムから考えて、人間自身の存在が危うくなるという危機感があります。たとえば気候変動や海の汚染、あるいは生物資源の枯渇などは、生き物にとってだけでなく、人間そのものが困るという時代が来ています。すべての生き物が地球の生態系の担い手。さまざまな矛盾の解決のためには、好き嫌いで差別することなく、自然を見つめる私たちの目と、自然についての本質的な理解と付き合い方を根本から変えていく姿勢が必要であることに気づくはずですよ」

人間の活動が地球の未来を左右するまで大きくなった現在、私たちの生き方も含めて「地球の使い方」を考えていかなければならないと先生は指摘します。



「何だろう?」「はてな?」と思う気持ちが大切だという三島先生。その旺盛な好奇心で、エコロジーの世界を切り開いてきました。

「命の本質をみなさんにもよく理解してほしいのです。たとえばカエルが生きていくためには、餌となるいろんな虫がいなければなりません。一匹のトンボが生きていくためには、その何倍もの虫がいらないといけません。そういった命の連鎖が、うつかりすると見えなくなってしまう。自然界というのは『つながり』があるという理解が大切です」

それがまた見えにくいものなのですが。

「理屈は簡単ですから、難しいことでもなんでもないんです。自然の中の物質の循環、エネルギーの流れ、あるいはどの生き物の視点に立つての『環境』

なのか、マクロからミクロまでのレベルで考えるか。そういったことは、みなさん、わりとご存じなんです。でもそれが、自然との付き合いの中ではふつと消えちゃうんですね」

はてな?と思う心が大切

長年、教育者として多くの人にエコロジーを伝えてきた三島先生が、いま改めて伝えたいことは何でしょうか。

「私の話を聞いてわかりきったことのようにしないで『あれっ?』『はてな?』と思っしてほしい。こう思っただけで、こう

だろう。そういった再発見みたいなものに気づいてほしいですね。私は自然を中心に話題にしていますが、黙っていると見過ごしてしまうけれど、それを聴くと『はてな?』と思う気持ちが湧いてくることって周りにいっぱいあるでしょう。『はてな?』という心はその人を大きく育てます。そこから大きな未来が生まれてくることもあるでしょう」

「見えない自然の働きを見る」ことを大切にしてきたという三島先生。その目に映るトンボやカエル、蛾や植物たちの世界は、きっと誰にとっても住みやすい世界に違いありません。

「緑のカーテンを育てる」

ここ板橋区高島平の高島第五小学校の校舎は、「緑のカーテン」に覆われています。

子どもたちが育てたヘチマやゴーヤが4階まで伸びて、夏でも目に涼しげな葉を茂らせているのです。

部屋を涼しく快適にする効果だけでなく、育てたゴーヤを料理したり、情操教育にもよいという学校の緑化。

その成功の秘訣と、取り組みの実際を取材しました。

エコだけじゃない
「緑のカーテン」の魅力



音楽担当で、緑化担当でもある菊本るり子先生。緑のカーテンは、楽しい、おいしい、快適、電気代が安くなる、そして健康的だといいます。



音楽室の窓の外は一面の緑のカーテンが夏の日差しを和らげてくれます。

エアコンなしでも 快適な学校生活を

「緑のカーテン」を仕掛けたのは音楽担当の菊本るり子先生。たくさんの太鼓が並ぶ楽しい音楽室におじやますると、窓辺にはブドウの緑の葉が生い茂り、たわなに実ったブドウの実がいくつもぶら下がっていて目を奪われます。そもそもこの活動を始めたきっかけは、なんだったのですか？

「実は私、エアコンが苦手なんです。いま住んでいるマンションでは、緑の力と風通しのおかげで、夏でもエアコンに頼らない生活をしています。学校もエアコンの導入が進んでいます。ただ便利だけではないの？という思いや、エネルギー消費や室外機の排熱は？という疑問から自分にも快適で地球にもやさし

いという価値を伝えたいと思ったのです」

たしかに、子どもたちのなかにもエアコンが苦手な子がいてもおかしくありません。でも、緑化は手間がかかるし、費用はどうしているのですか？

「最初に相談したのは、エコマシオンを手がけた会社の社長さん。お話ししたら、一緒にやりましょう！ということになりました。でも、学校はいま週休二日ですから、週末の水やりが大変です。だから自動灌水装置が必要だと気づき、自分たちで作ることにしました。幸い、資材の提供から技術指導までご協力いただき、先生方や保護者と一緒に、たった2日間で最初の灌水装置を作ったのです」

試みが始まったのが2003年。今でこそ緑化の技術は書籍やインターネットで紹介されていますが、当時は試行錯誤の連



水道水の温度を測ってみます。放射温度計は決して人に向けないように！

続。植物は何がいいか、植物が這いやすいように縄を張るにはどうすればいいか、土はどうするか、栽培の工夫は？数々の失敗を重ねながら、その理由と成功の秘訣をまとめたハンドブックを作ったり、緑のカーテンづくりをサポートするNPOの設立にまで関わったそうです。

実感と体感の授業

6年生の授業におじやました。この日の課題は温度測定。放射温度計の使い方を習うと、子どもたちはさっそく外に出て気になるところを測り始めます。「緑のカーテンの内側の地面は

温度の違いを感じる、測る



日の当たるところで温度や風、湿度を感じてみよう。日陰との違いがはっきり感じられるでしょう。



カーテンの内側は日差しを遮られたせいで涼しい。実際の温度を測って数字で記録しましょう。

29度。カーテンのないところは50度。校庭は何度だろう？意外だったのが、空を測ったときのこと。センサーを青い空



植物の育つ力を引き出す

ヘチマは4階のベランダまでぐんぐんと成長しました！ ここまでの数カ月間で子どもたちはみな、植物の「生命力」を実感していることでしょう。小さい苗が大きくなり育つにつれ、子どもたちもたくさんの経験をします。



ネットを4階までしっかり張る。花壇と灌水装置も自分たちで用意したといいます。



緑のカーテンの詳細は本でも知ることができます。『学校で育てる緑のカーテン大百科』（学研教育出版）、『みどりのカーテンをつくろう』（あかね書房）



ヘチマの花にはハチの仲間が！ ハチミツか花粉を食べている様子でした。



自動灌水装置が学校の緑化には欠かせません。



ブドウとゴーヤ、ヘチマがたわわに実ります。

緑のカーテンが子どもを変える

緑のカーテンに取り組みようになって、子どもたちはどう変わってきたのでしょうか。

「草むしり、水まきなどの世話

に向けてボタンを押すと「マイナス19度だって！」と大きな声が校庭に響きました。体で感じる気温は、日差しの強さはもちろん、前日の雨、風なども影響します。今度は温度計を置いて目を閉じ、じっと自分の体でも感じてみました。「体の感覚を研ぎすますことで、体感と知識が結びつく。それが生きる知恵にもつながるので」と菊本先生。

を通じて、植物に対して愛情を感じるようになってきたようです。自己中心的だった子が、夏休みでさえ一日も欠かさず植物のお世話に通ってくれたり、人の意見を聞ける子になったり。進んで面倒なこともやれるようになり、自分の成長を感じている子もいます。植物を育てること、命に触れることが、子どもたちの中にある何かを引き出してくれたのだと思います」

小さな苗が大きくなり、花を咲かせて実をつけ、最後は根本を切って堆肥に還すまで、「命」を感じる体験を通じて感性が育ち、磨かれます。失敗することもあります。気づきもたくさんあるのです。

「植物を育てるコツには、土づくり、ネットの張り方、植え過ぎない、などがありますが、これはみな失敗から学んだのです」

菊本先生の明るい声に、励まされた気がしました。

東京の
学校の
みどりも
楽しむ！

杉並区

「プールのヤゴ救出大作戦」

梅雨入り直前の5月末日、小学校のプール開きの準備の一環として「ヤゴ救出大作戦」が行われました。学校のプールには、火災予防の意味もあつてシーズンオフの間、水がためられています、水を抜く際にプールにいたヤゴが流されるのを防ぐことで、田んぼやため池が減ったせいで数が減りつつあるトンボの保全に貢献しています。もちろん、子どもと大人の貴重な自然体験の場にもなっています。



まずはプールに入ろう！

こんなプールに入るのは初めてでドキドキ！ 滑りやすくて、ちょっと気持ち悪いという子も……。でも、すぐに慣れてしまつて、気がつけばご覧のとおり、誰もが夢中でヤゴを探し始めます。



「いるいる！ ヤゴがいる！」
子どもたちの声が学校のプールに響き渡ります。初夏の日差しが水面にまぶしく反射していても、今日はプールで泳ぐ日ではありません。
ここ杉並第一小学校は、JR阿佐ヶ谷駅のほど近くにある都会の小学校です。
プールの水はだいぶ抜いてあり、今の4年生たちが去年、木の枝とペットボトルでつくった「いかだ」が浮かんでいます。これは、去年の秋からたまっていたプールの水を目当てに飛んできた多くの種類のトンボたちが卵を産みやすくなるためのもの。今日のプールでの授業は、それらの卵から孵ったトンボの赤ちゃん「ヤゴ」たちを、プールの水抜きの前に救出するのが目的です。

安全に水辺で遊ぶ 体験の場

サポート役の大人たちの導きで、プールサイドのステップを伝つておそろのおそろのプールの中に入っていく子どもたち。水は決してきれいとはいえません。足元はケガをしないよう靴や水遊び用シューズを履いています。一人ひとりに手網を渡され、子どもたちはさっそく水底に網を添わせて、お目当ての「お宝」を探し始めます。ほとんどの子どもたちにとって、こんなに濁った水に入るのは、おそらく生まれて初めてのことでしょう。

3年生を対象としたこの特別授業は、杉並第一小では毎年恒例の行事です。
「これ、なんの種類？」
事前の授業で子どもたちは、トンボには大まかに分けて4種類いることを習っています。アカトンボ、シオカラトンボ、ヤンマ、そしてイトトンボ。それぞれ種類ごとに分けて数えています。
ヤンマは大きいので見つけるのは比較的簡単ですが、力強く逃げ足も速い。イトトンボは数も少なく細いだけに、見つけるのが難しい。そういったことを子どもたちは体験を通して感じ取っているようです。
2時間の授業で得た成果は、アカトンボ883匹、シオカラトンボ53匹、ヤンマ467匹、イトトンボ17匹の計1420匹！



サポート役のお母さんたち。事前説明を聞くとときも真剣です。なかにはヤゴに触るのは初めてという人も。

トンボが 命のつながりを 教えてくれる

「アカネやシオカラは打水産卵といって、飛びながら水面に卵



ヤゴいたよ！

ヤンマのヤゴは大きいから見つけやすい。よく見ると、下アゴが折り畳まれているのがわかります。



見て見て、こんなに捕まえたよ！ 子どもたちの得意げな顔がなんともいいですね。



種類ごとに分けて、数を数え上げる

捕まえたヤゴは、クラスの水槽で飼ったり、希望者の家で飼われることに。来年には3割ほどのヤゴがトンボになるといいます。これは自然の羽化率の10倍というから、数が減りつつあるトンボのためにどんなに役立っているかがわかります。



「見つけたよ！」子どもの元気な声がプールに響き渡ります。「収穫の喜び」は格別なのです。



どこにいるかな？ プールサイドに網の中身を広げてヤゴを探します。すぐ上手に見つけられるように。



を産むことができますが、イトトンボやヤンマは植物の繊維質に産みつけます。いかだが役に立ったわけです」と今日の先生役の境原達也さん。NPOすぎなみ環境ネットワークとして杉並区内の小学校でヤゴ救出作戦をサポートしてもらう14年になる大ベテランです。

「プールの季節が終わったら、今度はこの子たちが来年の3年生たちのために産卵用いかだをつくりまします。そうやって次の学年に受け継がれていくのです」ところで、気になるのが救出



トンボの先生、境原達也さん。子どもたちの笑顔を支えに、長年、杉並の小学生の授業をサポートしてきたベテランです。



ヤゴは夏前に羽化して飛び立ちます。羽化の様子を間近で観られるのが飼育の魅力です。

したヤゴ。これだけたくさんヤゴを捕まえて、この後どうなるのでしょうか。

「何匹かは去年いかだをつくってくれた4年生にあげる約束になっていますが、3年生の教室で飼ったり、家で飼う子もいます。ペットボトルと割り箸、剣山、輪ゴム、あとは水草があればヤゴの飼育槽ができます。餌はイトミミズやアカムシ。家庭内で羽化のドラマが共有されればいいですね」と境原さん。

取材を終えて駅に戻る途中、大きなギンヤンマが一匹、目の前に飛んできて、雑踏の中を通り抜けていきました。あんなに立派なギンヤンマをこんな都会で見るとは！ きつとあのギンヤンマも、杉並第一小の卒業生の一匹に違いありません。

特集3

東京の
学校の

みどりも

楽しむ！

世田谷区

「学校ビオトープで生き物に親しむ」

ビオトープに取り組む学校が増えてきました。世田谷区立等々力小学校もそのひとつ。23区内で唯一の渓谷である等々力渓谷にほど近く、比較的緑の多い等々力地区ですが、やはり子どもたちは都会っ子。そんな子どもたちが、校内の小さな自然と向き合い、そこに暮らす生き物の生態を学びながら、自然再生活動に取り組んでいます。

現場での学びを深める
教室での事前学習

ビオトープの授業を受け持つ「人と自然の研究所」の三森典彰さん。子どもたちの興味を引き出す手腕が抜群。

トンボの種類によって、ヤゴの体のつくりも違います。7月に行われた2回目の授業では、ヤゴの生態についてしっかり学びました。



じっとしていないヤゴの姿を描くのは大変！



顕微鏡でヤゴをじっくり観察。最初は「気持ち悪い！」と言っていた子も、やがて夢中に。

「見つけた！ ヤゴがいるよ」「どこどこ？」
「その石の陰だよ！」
よく晴れた秋の一日、子どもたちは校庭の一角にある池を覗き込み、ヤゴ（トンボの幼虫）を探すのに夢中です。ここ世田

谷区立等々力小学校は、環境教育の一環として熱心にビオトープの活動に取り組む、4、5年生の2学年が、講師を招いてビオトープの授業を受けています。この日は4年生が、生き物の棲みやすい環境整備に取り組んでいました。

生き物が暮らしやすい環境をつくらう

等々力小学校のビオトープには、コブシ、ウメ、サクラ、キンモクセイなどの樹木に囲まれるように小さな池と田んぼがあります。池はヤゴにとって格好の住処。トンボは卵からヤゴの時期を水中で過ごし、成虫になると水から出て空に飛び立ちます。水域と陸域の両方の環境が必要なトンボは、ビオトープと周辺環境のつながりを知る上で、

大切な生き物なのです。今日の授業の講師を務めるのは「人と自然の研究所」の三森典彰さん。ビオトープによる自然再生事業の専門家です。「シオカラトンボやギンヤンマは明るい環境に棲んでいるけど、オオシオカラトンボやクロスジギンヤンマは暗い場所が好きなんだね」
説明を聞く子どもたちの目は好奇心で輝いています。
等々力小学校の池は、周りの樹木の葉が生い茂り、日が当たりにくくなっていました。落ち葉などが池の底にたまり、水中の酸素も不足気味です。多くの種類の生き物が暮らしやすいよう、この日の授業では、池の泥をかき出し、樹の枝を剪定することになりました。
池の底から泥をバケツにくみ出し、隣の田んぼに移します。

学年全体でビオトープへの関心を高める工夫がいっぱい



校内の壁にはビオトープに暮らす生き物の特徴が貼り出されています。4、5年生以外の子どもにも、ビオトープへの関心を高める工夫のひとつです。



よく目を凝らしてみると、泥の中に何やらもともと動くものがあります。

「あれ、ヤゴかな？」

子どもたちは夢中になってヤゴを探していました。

4年生にとって、ビオトープの授業はこの日が3回目。第1回の授業では、小さな生き物が



池の底をすくってバケツで運びます。泥が堆積すると池が酸素不足になり、ヤゴの生息環境としても好ましくありません。



泥の中にヤゴを発見！

「ヤゴがびっくりして慌てているときを見つけやすいよ」という三森さんのアドバイスを受け、バケツの泥を田んぼに移すや否や、ヤゴがいらないか目を光らせます。



通常は5年生が社会で学ぶ稲作文化も、田んぼビオトープを通じて人の暮らしと生き物の関係を学びながら、教科の枠を超えて総合的に学習します。



木の剪定に挑戦中。ちょっと慣れない手つきながらも、池の日当たりをよくするためにがんばりました。

オシロイカサミのメス

剪定した枝を運びます。意外と重い！



枝の剪定を終えて、すっかり明るくなったビオトープ。池にも日が当たるようになりました。



校庭の一角につくられたビオトープは自然再生を学ぶ格好の教材

「生き物がいるのがおもしろい！」と楽しむ子どもたち。「最初は苦手な子も徐々に慣れてきていますよ」と、先生も子どもたちの変化を実感しています。

学年や教科の枠を超えた学びを

好む環境を知り、その環境をどう保つべきか考えました。2回目の授業では、池から捕獲したヤゴを教室に持ち帰り、顕微鏡でじっくり観察。トンボの種類によってヤゴの体の特徴や生息環境が違うことを知りました。この2回の授業があったから、3回目の授業で、生き物の棲みやすい環境を整え、管理する意味がわかるのです。

「等々力小学校のビオトープ教育の特徴は、学年を超えて連続的な学びができるよう工夫しているところだ」と三森さん。「学年末には4年生から3年生への引き継ぎ発表会があり、新たにビオトープの授業を受ける子どもたちに、上級生が手入れ

をしてきた自然を『引き継ぐ』という意識付けをします。もうひとつの工夫は、4、5年生はもちろん、ほかの学年の子どもたちにとっても、ビオトープを日常的な学校生活に組み入れていることです」

全学年の児童から「ビオトープ川柳」を募集するなどして、通常は「理科」に分類される生き物や自然に関する学びを、教科の枠を超えた学習要素と絡める工夫をしているのです。

秋吉達也校長は学校ビオトープの意義を語ります。

「自然に触れさせたくても、できない家庭もある。だからこそ学校で取り組みたい。小さい頃の自然体験が、成長後の伸びしろを大きくするはずだ」

学校ビオトープを巣立った子どもたちが、どんな感性を身につけるのか楽しみです。

東京の
みどりの
活用と
創出

武蔵村山市

「里山でボランティア体験」

かつて、集落近くの山は「里山」と呼ばれ、薪や炭、肥料などの供給地として丁寧に保持されてきました。昭和以降、経済価値を失い放置されたり宅地化されたりと、環境の変化にさらされてきた里山ですが、近年は、多様な生物の生息場所や、持続可能な自然資源の利用などから、その価値が再評価されています。狭山丘陵の一角、ボランティアの支援で管理されている里山を訪ね、人と自然の新たな関わり方を体感しました。



作業前のミーティング。毎回、雑木林を下見して必要な作業を決めます。この日は散策路の下草刈り、植林地の坪刈り、竹林の整備、植生調査を行うことに決め、作業を割り振っていきます。



ボランティアが作業している谷戸の中、木々に囲まれひっそりと佇む神明社。古く伊勢神宮から勧請したと伝えられています。



かつてこの地に住んでいた高岡氏の墓地は、集落を見下ろす位置にあり、眼下に広がる田畑やそこで働く人々を見守ってきました。

木もれ日の差す雑木林の中で、ひっそり佇む墓地に般若心経が静かに流れています。

ここは都立野山北・六道山公園の小さな谷「神明入」の奥にある高岡墓地。無縁仏になった墓に花をたむけ手を合わせるのは、公園で活動する雑木林ボランティアのメンバーです。この日は旧暦のお盆。作業前に全員そろって墓参りをし、安全を祈願したのです。

「この墓は、下の田畑で働く子孫をずっと見守っていたのですから、僕たちも守ってくれるはず。」

ず。みなさん安心して作業にかりましょう」

隊長役の村山友直さんの話しぶりに笑いがもれ、和気あいあいと作業が始まります。

来園者が楽しめる 雑木林づくり

都立野山北・六道山公園は狭山丘陵の南西部にあり、開園面積約200ヘクタールという都内最大の公園です。入り組んだいくつもの谷と尾根が豊かな自然を織り成し、自然に親しむ人々ににぎわいますが、その一角にある里山体験エリアがボランティアの主な活動の場です。里山体験エリアは、江戸時代、草地と田畑が広がる集落だったのですが、いつしか人が住まなくなるとさまざまなゴミが持ち込まれ、昭和の終わりには巨大

なゴミ捨て場になっていました。その量、実にダンブカー19000台分。一時は宅地開発の波にさらされたものの、そのゴミが片付けられた後、里山の大切さが見直され、公園として残されることになったのだそうです。

「ここはかつて集落の草刈り場だったんですよ。それが放置されて雑木林になったのです。私たちはここを来園者が気持ちよく楽しめる雑木林にしようとしています」

そう話すのはNPORibirthのスタッフでフォレストマネージャーの松井一郎さんです。森林浴や散策を楽しむ、自然を学ぶ、動植物の生息地になるなど、公園の果たす役割を大切に、癒やしや安らぎを感じられるように林内の景観をつくるのが目標とのこと。

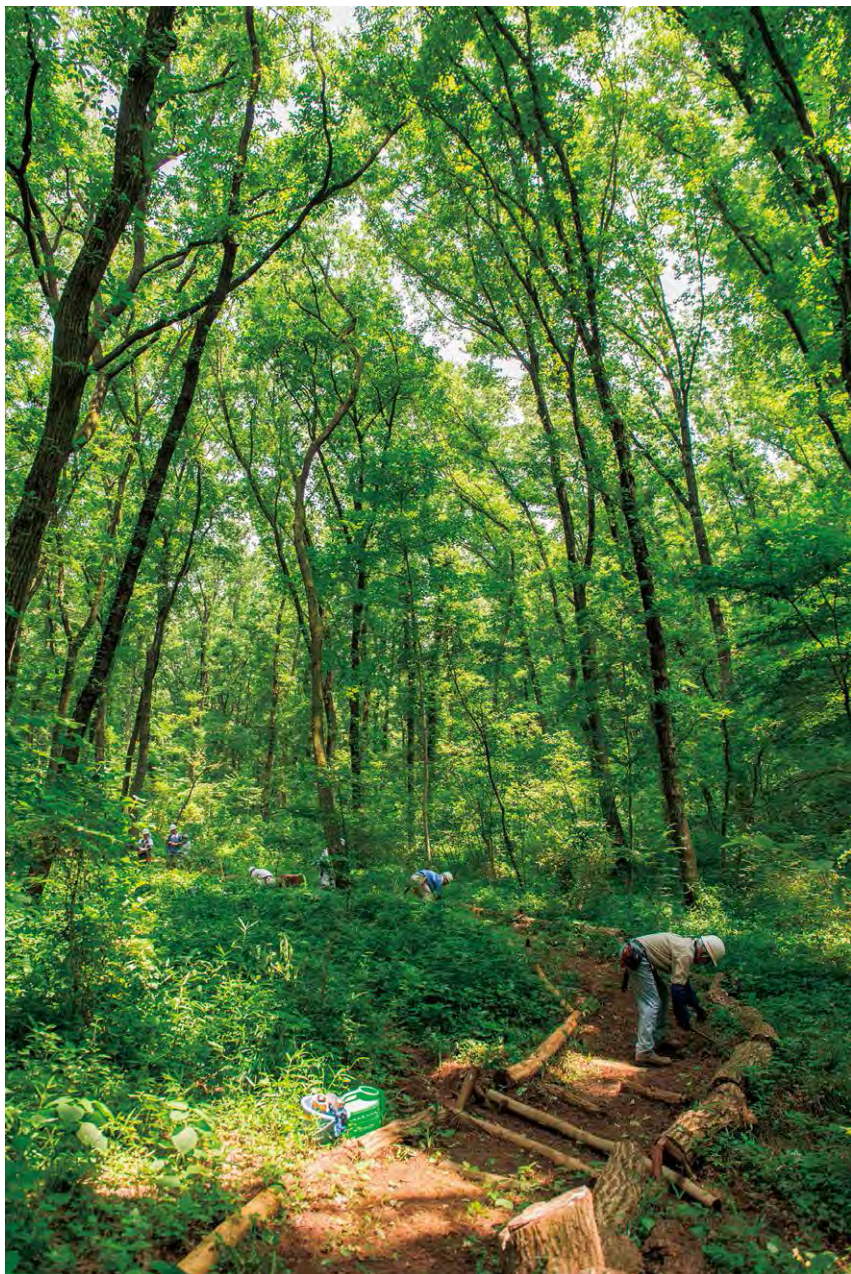
一方、継続的な植生調査によ

り、生態系の変化を把握し生物多様性を守るための活動も行っています。

人も生き物も にぎわう里山へ

ここでは、1988年の開園以来、個人や地域が所有していた里山が、コモンズ（共有地）という新たな位置づけを得て公園となり、都の「協働重視」の方針により、早くからボランティア活動が行われてきました。2006年からは、指定管理者である西武・狭山丘陵パートナーズ（NPORibirthを含む4団体で構成）による管理運営が始まり、新たな「協働型パークマネジメント」が行われています。

ボランティアは年々登録者が増え、今年は405人。その3



散策路の下草刈り

谷戸の入り口から高岡墓地まで歩いて10分ほどの散策路に、メンバーが散らばって草を刈ります。来園者が安全に気持ちよく森林散策を楽しむための作業です。



NPO birthのフォレストマネージャー松井一郎さん。みんなから「先生」と呼ばれ絶大な信頼を集める松井さんは、森林インストラクターでもあり、基本的な雑木林の保全作業から刃物の扱い方まで何でも教えてくれます。



里山の風景

田畑があり、草地や湿地があり、雑木林があり、それらがすべてつながって、さまざまな生命を育み、里山という環境ができあがっています。



作業に参加した雑木林ボランティアのメンバー。明るい冗談が飛び交って、里山民家の縁側は和やかな笑い声に包まれます。



散策路と林の境を示す丸太は、キノコに分解され、自然に戻ろうとしています。丸太の上のキノコは倒木分解性のチャウロコタケ。



植生調査

この雑木林に見られる植物は多いときで90種近く。優占種のコナラの下にはカマツカやイヌツゲ、ヤマツツジなどの低木やミズバ、ミズヒキ、チヂミザサなどの群落が広がります。



片手造林鎌

普通の草刈り鎌とは刃の形が違い、この鎌なら細い木もなぎ倒すことができます。やや小ぶりでボランティア向き。この公園では機械を使わず、手道具だけで作業を行っています。



竹林の整備

地下茎で殖える竹類は、油断しているとどんどん広がり、森や草地を呑み込んでしまいます。それを防ぐには、とにかくタケノコを食べ、竹を利用するのが一番。林床を片付けて日当たりと風通しをよくします。

分の2は継続者で、30〜50代も大勢います。若い世代は、イベントや講座に家族連れで参加し、そこから登録する人が多いようですが、コーディネートターの磯脇桃子さんのお話では、最初は子どもと一緒に汗を流すため参加したお父さんが、気がつけば自分の楽しみとして活動にはまってしまうケースも少なくないのだとか。

松井さんは、「現役の人には仕事のほかにもうひとつ、一生懸命になれるものを持つたほうがいい。人生が豊かになる」と言います。初めは雑木林と田んぼ、畑の3つだったボランティア活動も、今では15以上があり、そのすべてがボランティア自らの発案で始まったのだそうです。多様な生き物と人々が集う里山で、さまざまな出会いが生まれ、夢中になれるものを見つけたら、自然を慈しむ心がより強くなるのかもしれない。みなさんの生き生きとした笑顔に接し、そんな思いが浮かんできました。

東京の
みどりの
活用と
創出

「薪をつつてホホを温める」

檜原村

薪ストーブなど木質バイオマスのエネルギー利用が、近年にわかに注目されています。赤く揺らめく炎を眺めていると、心癒やされる効果は抜群。しかも、地場産の薪材を使うことで森の整備が進み、温暖化対策にもつながります。古くて新しい薪づくりを檜原村で体験してみました。



両足を肩幅に開いて構え、気持ち手前をめざして振り下ろす。力みすぎず、斧の重さを生かして振るのがコツです。

「えい！」
両足を肩幅に開いて頭上高く掲げた斧を振り下ろすと、薪がみごと二つに割れます。この日、東京都西部の檜原村で開催された「薪づくり体験」イベントの一幕です。
ここは、旧南檜原小学校跡地（檜原村南郷地区）に2012

年4月から開設している村営の薪燃料製造施設。地元のシルバーク人材センターに業務委託して、年間84日の稼働で年に約150トンの薪を製造しています。
参加したのは、都内各地をはじめ横浜、所沢など近郊地から集まった総勢24人です。

斧の刃の重みと厚みで薪を割る

薪割りを指導するのは、施設長の大谷正平さんと山崎俊彦さん、東京チェーンソーという林業会社の青木亮輔さんの3人。

コーディネーターの石山恵子さんの指示で半数ずつのグループに分かれ、斧を使った薪割りと、薪割り機を使った薪製造の二つの作業を交代で体験します。

2台ある薪割り機はともに外国製。施設長の大谷さんが機械の操作方法と安全確保について

レクチャーしてから、一人ずつ、実際に動かしてみます。
「今日、みなさんに割ってもらう木はヒノキです。材質は軟らかく割りやすい木ですが、この機械ですと硬いも軟らかいもなく割ってくれます」
薪割り機のレバーを引くと、油圧ピストンが作動して、大きな刃が薪を押し割っていきます。施設では、できた薪を90センチ四方のパレットに積み上げるため、40センチの長さで切りそろえて2列ずつ並べます。そのまま半年から一年ほど自然乾燥させて、搬送しています。

斧グループでは、山崎さんと青木さんが斧の使い方を指導します。山崎さんは、「薪は斧の刃の重みと厚みで割る」と言います。力任せに叩きつけなくても、丸太の表面に食い込んだ刃がその重みと厚みで、木の繊維をメモリと裂き割ってくれるというわけです。

薪で沸かす温泉施設

お昼は場所を移して、さらに山奥の温泉施設「数馬の湯」へ。檜原村産の食材満載の釜飯でお腹を満たし、食後はいよいよお楽しみの温泉です。

汗を流してさっぱりした後、施設の裏に回って、薪ボイラーを見学。2012年4月に2台導入した薪ボイラーは、出力80キロワットのスイス製。薪をフルに充填すると3〜4時間燃え続け、途中3回ほど薪を詰め直して、一日にパレット1台分の薪を消費します。既存の灯油ボイラーと併用することで、年間100〜120トンの二酸化炭素削減につながるのだそうです。実は、午前中に作業した薪燃料製造施設で作っている薪燃料は、主にここ数馬の湯で使った

斧や薪割り機を使って薪割りをする



フィンランド製の自動薪割り機。原木のままセットし、レバーを下ろして付属のチェーンソーで玉切りすると、油圧ピストンが作動して十字の刃で4つ割にします。できた薪はそのままベルトコンベアで送り出されて、1カ所にたまります。



アメリカ製の手動薪割り機は、あらかじめ40センチに切っておいた丸太を台の上にセットし、レバーを操作して刃を上下させ、27トンの力で割って薪にします。



左から、コーディネーターの石山恵子さん、薪割り講師としてご指導いただいた施設長の大谷正平さんと山崎俊彦さん、東京チェーンソーの青木亮輔さん。



薪づくりは廃校になった小学校跡地で

午前中は薪燃料製造施設の敷地内での薪割り体験。参加者たちはグループごとに薪づくり体験をします。檜原村は面積の93%が森林(うち7割がスギ・ヒノキ人工林)なので、木材資源も豊富です。

温泉施設のバックヤードにある薪ボイラー



1日にパレット1台分を消費する薪は、人里(へんぼり)地区にある薪保管施設で半年から一年かけて自然乾燥させ、パレットごと搬送してきます。



上蓋を開けて薪を詰め、毎朝、手口けで火を入れています。薪ボイラーは立ち上がりの加温が弱いので、最初は灯油ボイラーで、その後の保温を薪ボイラーでまかないます。出てくる灰はわずか1%という高燃焼効率です。



道の脇に積まれているのは、林道を切り拓く際に伐採した木々。こうした伐木が薪燃料製造施設に運び込まれ、檜原村産の薪として加工されています。



お昼は数馬の湯で、檜原村産の山菜やキノコがたっぷり入った釜飯に舌鼓を打ちます。広間の暖房は薪ストーブ。部屋の中はボカボカで、お客さんにも好評です。



広間には薪ストーブを入れて、部屋の中を暖めています。薪ストーブの導入で、エアコンによる暖房が必要なくなりました。小さな覗き窓から炎も見えて、お客さんにも好評です。

一日だけの薪割り体験でしたが、「木と火のある暮らし」の大変さと楽しみの両面を垣間見られた気がします。

薪づくりの後は、数馬の湯へ



1996年にオープンした数馬の湯では、2012年度から薪ボイラーを導入し、既存の灯油ボイラーと併用して源泉の湯温28度を42度にまで上げています。

森林の資源活用は 林道整備から

この日最後に向かったのは、馬場地区にあるスギ・ヒノキ林。林道を上って、森の中の散策

路に入り、石山さんからスギとヒノキの識別方法や森の整備について話を聞きました。「林道ができたおかげで木が伐り出せるようになりました。この森では、80〜100林齢の太くてよい材として出せるように育林していきます」
間伐して光を入れたことで、中層に低木、下層には草も生え、スギ・ヒノキの植林地らしからぬ明るい森になっています。林道脇に積み上げられた丸太は、この林道を開設したときに切り倒した木。こうした木が、薪燃料製造施設に運び込まれ、檜原村産の薪になるのです。

固定したもので、差し引き増減なしとみなせます。薪を使えばその分、化石燃料である灯油の使用が減るので、二酸化炭素削減につながるのです。

木を使うことで森を整備し、同時に温暖化対策にもなるこの取り組みは、2009年に策定された檜原村バイオマスタウン構想に基づく事業なのです。

東京の みどりの 活用と 創出

目黒区

「屋上緑化で創られた天空庭園」

首都高速道路の3号渋谷線と中央環状線を結ぶ大橋ジャンクションは巨大なコンクリートの構造物ですが、ユニークなループ状の形と環境対策としての屋上緑化で知る人ぞ知る場所です。都会の貴重な憩いの場として広く市民にも開放され、犬の散歩やフットサルの場として利用できるだけでなく、ワイン用のブドウ棚や野菜畑まで備えた「目黒天空庭園」の魅力を紹介しましょう。



市民の憩いの場に

視界が三六〇度開ける庭園は、なんとも清々しい。植栽は、なるべく日本の植物を取り入れ、信楽焼のプランターや腰掛けを置いて和のテイストでまとめています。



「ペットお散歩登録証」を下げ、犬の散歩をしている利用者は、車や自転車がない園路は、ペットにとっても歩きやすいでしょう。

東急池尻大橋駅の東口から地上に出て、右方向へ3、4分歩くと、桜並木で知られた目黒川に出ます。上空を塞ぐ首都高速から2本の支線が延び、大きくカーブを切って巨大なジャンクションへとつながっています。ジャンクションを囲む灰色の擁壁を通り過ぎ、隣接するクロスエアタワーのエレベーターへ。

9階で降りたら通路を進み、ガラス張りの自動ドアを抜けてデッキに出ると、三六〇度、遮るもののない青空の下、清々しい天空庭園が眼下に広がっていました。それは、さながらバビロンの空中庭園。そそり立つ擁壁の上に、こんな空間が広がっているなんて、地上を歩く人々は気づいているのでしょうか。

天空に広がる 憩いの空間

公園の管理者である目黒区都市整備部の前田正一さんに、園内を案内していただきながら、お話を伺いました。

「ここ目黒区大橋一丁目に、首都高の高架3号渋谷線と地下トンネルの中央環状線を結ぶジャンクションの建設が決まったの

が1990年。幹線道路が交差する交通の要所に、新たな道路施設が出現すると、さらに環境悪化が進むことになり、地元には大きな不安が広がりました」そこで、ジャンクション全体をコンクリートの壁と天井で覆う計画が立てられ、「子どもたちが自由に走り回れる緑の公園が欲しい」という要望に応える形で、屋上の緑地化・公園化が決まったそうです。

お話の途中で、若い女性が足早に通り返り過ぎていきました。散策を楽しんでいるようには見えませんが、不思議に思っただけで前田さんにお尋ねすると、この園路はクロスエアタワー9階にある大橋図書館や区の施設を訪れる人たちの通り道や、近隣住民の生活道路にもなっているとのこと。2013年3月の開園からわずか2年で、すっかり地域にとけ



お母さんと散歩に来ていた男の子。見通しのよい空間は、子どもの見守りにちょうどよく、親にとっても安心できます。

住民参加の ルールづくり

込んでいます。

区では2008年に公園づくり検討会を立ち上げ、住民参加型で事業を進めてきましたが、その成果が利用ルールにも現れています。たとえばペットの散歩ルール。ここで犬を散歩させ



目黒天空庭園の全景

ループ型ジャンクションの屋上に広がる庭園は、全長約400メートル。正面にあるクロスエアタワー前の東口広場が最高地点で、地上35メートル。ぐるっと一周して高速道路の下、地上11メートルにある歩道橋まで、5%の傾斜が続いています。ループの中心の緑はオーパス夢ひろば、その左の建物は高速道路の換気所。ここで空気を浄化して外に出します。



大橋図書館から帰る親子連れ。

世界七不思議のひとつバビロンの空中庭園は、ただ一人の王妃を慰めるために造られたと伝えられています。21世紀に登場した目黒天空庭園は、人を含むすべての生き物のため、心地よい環境をめざしているようです。

もともと緑の少ない目黒区ですが、ここを拠点とした「生きものネットワーク」構想では、近くにある駒場公園や代々木公園などの緑地と周辺の小さな公園を結び、鳥や虫、さまざまな生物の生息環境を守ることを目標にしています。

雨が一気に河川に流れ込んで氾濫を起こすのを防ぐため、森や水田の「緑のダム」の機能と同じ。この庭園は都市を守る緑のダムの役目もあるのです。

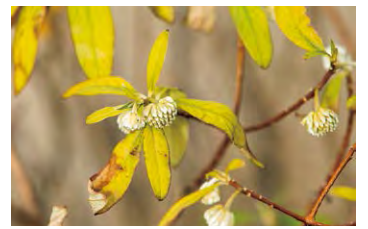
み、厚さ50センチから1メートルに盛り土しています。土の下には人工の排水路と土が流れるのを止める堰堤が18カ所、貯留槽が21カ所設けられています。貯留槽は雨水を一時的にためておき、雨が上がってから少しずつ目黒川に流すための装置です。コンクリートに降った雨が一気に河川に流れ込んで氾濫を起こすのを防ぐため、森や水田の「緑のダム」の機能と同じ。この庭園は都市を守る緑のダムの役目もあるのです。



クロマツの木にメジロが来ていました。目黒区の生物多様性戦略は「野鳥のすめるまちづくり」がコンセプト。この公園も一役買っています。



ソヨゴの赤い実。



ミツマタのつぼみ。

るには登録が必要で、飼い主は登録証を下げて散歩しています。が、他の場所に比べ、とてもよくマナーが守られています。地域住民によるガーデニングクラブやフットサルクラブの活動もあり、11月の収穫祭では、園内で収穫されたブドウを使ったワインの試飲や野菜の収穫体験

験、フットサル大会などのイベントが行われました。
グッドデザインは見た目だけじゃない
屋上庭園の面積は約7000平方メートル。ここに容積で5000トン相当の土を運び込



「薪をつくって森を守る」

檜原村木質バイオマス利活用事業

〒190-0212 東京都西多摩郡檜原村467-1

檜原村産業環境課生活環境係

☎042-598-1011(代表)

<http://www.vill.hinohara.tokyo.jp/biomass/index.html>

活動内容：檜原村では、森林保全・木質バイオマス利活用の取り組みとして、森林再生事業、花粉対策枝打ち事業、地場産材利用推進事業補助事業、地場産材搬出補助金事業、林道整備の推進などを実施しているほか、小・中学校の教室の木質化(2003年度～)、公共施設への薪ストーブ・ペレットストーブの導入(2005年度～)、「中央区の森」の森林保全活動等の連携(2010年度～)といった事業を行っている。

木質バイオマス普及促進の一環として2012年度から秋・冬の年2回実施している「檜原村で薪づくり体験 ～数馬の湯の薪をつくろう!」は、斧や薪割り機を使った薪割り体験をするイベント。薪割りの後は、村が製造する薪を燃料に使う温泉施設「数馬の湯」を見学し、お湯に浸かりながら、心にも体にも環境にもやさしい一日を過ごすことができる。



林業の支援事業を見学できる



「屋上緑化で創られた天空庭園」

目黒天空庭園

〒153-0044 東京都目黒区大橋1-9-2

オーパス夢ひろば

〒153-0044 東京都目黒区大橋1-9-4

<https://www.city.meguro.tokyo.jp/shisetsu/shisetsu/koen/tenku.html>

活動内容：目黒天空庭園は全長約400メートルのなだらかな園路に沿って、東口広場、四季の庭、あそびの広場、くつろぎの広場、潤いの森、もてなしの庭など10のエリアが配置されている。園内の植え込みもエリアごとにコンセプトを変え、クロマツやゴヨウマツを用いて和の趣を醸したり、コハウチワカエデやシダレザクラなどを取り入れて四季の移ろいを演出したりと、多彩な景観を楽しむ仕掛けが施されている。地域住民による公園活性化のためのボランティア活動も活発で、栽培ガーデニングクラブによるブドウ栽培や野菜づくり、中心にあるオーパス夢ひろばでのフットサル交流が盛んに行われている。開園時間は、午前7時～午後9時。オーパス夢ひろばの開園時間は、4月～10月は午前7時～午後7時、11月～3月は午前7時～午後5時。また夜間は、仕事を終えてからスポーツを楽しむ大人のために有料での利用が可能となっている。利用時間は一般開放終了後で、4月～10月は午後7時～9時、11月～3月は午後5時～9時。利用には団体登録が必要。詳しくは、目黒区みどり公園課（☎03-5722-9741）へ。ペットの利用にはお散歩登録が必要。登録は園内の管理棟へ。



和風庭園とビルの組み合わせが壮観

TOKYOみどりデータ便覧「学校と活用・創出」

「緑のカーテンを育てる」

NPO法人 緑のカーテン応援団

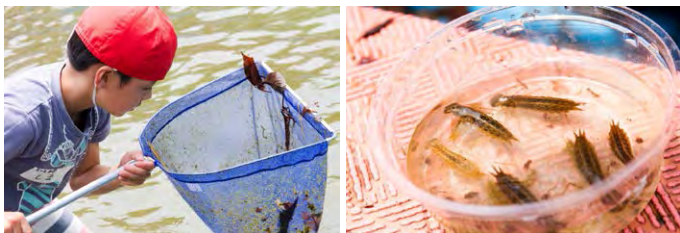
〒174-8601 東京都板橋区東坂下2-8-1 株式会社タニタハウジングウェア内
☎03-3972-0072 (株式会社リプラン内)
<http://www.midorinoka-ten.com/>

活動内容: 2003年から、小学校の総合的な学習の時間を舞台に、学校で緑のカーテンに取り組む活動をきっかけとして「環境問題、食育、環境緩和など幅広い分野」の今日の課題を学びながら実践することを目的に活動している。

『育てて楽しむはじめての緑のカーテン』(家の光協会)、『緑のカーテンの育て方・楽しみ方』(創森社)の出版や全国フォーラムの開催を通じて、学校でも、家庭でも、地域でも地球温暖化防止活動に貢献できる学びを提供し、日本全国へ緑のカーテンを広げている。また2011年以降、東日本大震災被災地の仮設住宅での緑のカーテンづくりにも取り組んでいる。



緑のカーテンは環境にも子どもたちにもやさしい



ヤゴという生き物に触れる機会はとても貴重

「プールのヤゴ救出大作戦」

NPO法人 すぎなみ環境ネットワーク

〒168-0072 東京都杉並区高井戸東3-7-4
☎03-5941-8701
<http://www.ecosuginet.jp>

活動内容: NPO法人すぎなみ環境ネットワークでは、杉並区内の各小学校で「ヤゴ救出大作戦」を行っている。総合的な学習の時間・環境学習支援の一環で、対象は3、4年生。5月から9月まで複数回にわたって、ヤゴという生き物を通して知識と体験を融合した総合的な授業を実施している。ヤゴの飼育や、次年度の授業のための「ヤゴいかだづくり」などもあり、学年を越えた交流を行うことも意図している。

ほかに学校と地域のサポーターや保護者が協力して取り組んだ「学校ビオトープ」などの実績もあり、校内で子どもたちが身近に生き物を観察できるような支援も行ってきた。この小学校の例では、6年生の「生き物調査隊」をはじめ、普段の授業に利用されていることが報告された。

「学校ビオトープで生き物に親しむ」

人と自然の研究所

〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-33-11-101
有限会社カルティバートカンパニー内
☎03-6453-4197
<http://www.bio-inste.com>

活動内容: 「人と自然の研究所」は、保全生態学や人間社会学といったさまざまな分野の研究者と市民やNGOなどをつなぎ、自然生態系に沿った生活ができる社会づくりをめざす市民シンクタンク。人材育成、自然再生事業、NGO活動の支援、新しいライフスタイルの提案などを行っている。人材育成の一つとして、環境保全の分野で活躍したい人向けに、ビオトープ管理者養成通信講座を展開している。テキストで生態系に対する正しい理解とビオトープ・自然環境の保全に必要な考え方を体系的に習得でき、スクーリングで現場に役立つ実務やビオトープ管理士の視点を体験的に学ぶことができる。学校ビオトープについては、本誌で紹介した等々力小学校以外でも、年間を通した総合的な学習としてビオトープを活用した環境学習と地域の自然再生活動を両立させたプログラムを各地で実施。また学校にとどまらず、企業や商店街などさまざまな主体とともに自然再生活動に取り組んでいる。



古民家が里山ボランティアのベース基地になっている

「里山でボランティア体験」

東京都立野山北・六道山公園

〒208-0032 東京都武蔵村山市三ツ木4-2
野山北・六道山公園インフォメーションセンター(管理所)
☎042-531-2325

<http://www.sayamaparks.com/noyama/>

野山北・六道山公園ボランティア事務局

〒208-0031 東京都武蔵村山市岸2-32 里山民家
<http://www.sayamaparks.com/volunteer/>

活動内容: 首都圏に残された「緑の島」狭山丘陵の西の端にあり、複雑に入り組んだ雑木林と谷間が作り出す豊かな自然が残されている。園内では季節ごとにカタクリやホタルなど貴重な生き物が見られ、ハイキングや野鳥観察、草花の観察、森遊びなど思い思いに楽しむ人々にぎわう。公園の一角にある里山体験エリアでは、「里山学校」や「季節のイベント」「収穫祭」など、ボランティアと協働で企画開催される盛りだくさんのイベントや講座が用意され、里山の自然や生活の知恵などを楽しみながら学び、体験することができる。ボランティアの主な活動は、里山体験エリアに建つ民家を拠点に、その背後の田んぼや湿地、畑、雑木林が舞台。里山保全やイベントの企画協力、伝統文化を伝えることを目的に、雑木林や竹林の手入れ、田んぼでのお米づくり、畑での野菜づくり、自然観察や調査、お茶づくり、外来植物の抜き取り、案山子づくり、門松づくりやすす払い、竹細工やわら細工など、幅広く非常に多彩だ。野山北・六道山公園でのボランティアは1年間の登録制で、毎年2月に次年度の募集をしている。詳しくは公園HPへ。

や思いを実現するために、町内会・自治会が行う尾根道や昔道の補修、景観の整備などについて、事前調査から計画立案・作業実施にいたるまで、地域との協働によって実施しています。また、市内の登山道や山林地帯を巡視し、整備・補修するとともに、市内に生息・生育する動植物の調査、滝や沢、巨木といった地域資源の掘り起こしなども実施。さらに、地域の森づくりに関連した自然環境体験イベントやプログラムの開催など、森とその周辺にある地域資源の持つ魅力を市内外のみなさんに向けて発信しています。

●お問合せ先

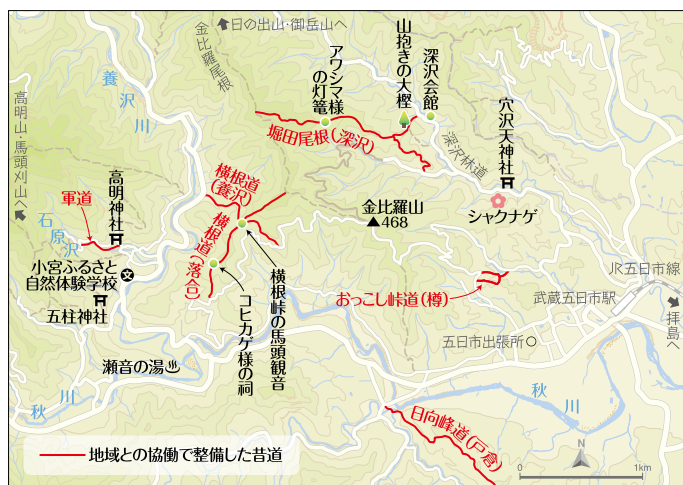
森林レンジャー

〒190-0164 東京都あきる野市五日市411

あきる野市環境経済部 環境政策課

☎042-595-1120(直通)

<http://www.city.akiruno.tokyo.jp/0000002691.html>



「TOKYOみどりマガジンVol.1」 読者の感想とメッセージ

編集部たくさんの声が寄せられました。ありがとうございます。
いくつか抜粋してご紹介します。Vol.1のプレゼント当選者は、抽選の上、発送をもって代えさせていただきます。

●都内に住んでおりますが、緑ある生活にとても興味があります。連載で1つ1つの区および市の取り組みや緑ある場所を掲載する記事を提案させていただきます。どうぞ宜しくお願い致します。(E.A.さん)

●表紙のイラストがとてもかわいくて好みだったので持ち帰った。掲載されている各団体への参加方法が分かりづらい。都内の緑が多い公園を紹介するコーナーなどがあると嬉しい。みどりに関する団体のイベント情報をカレンダー形式で載せて欲しい。個人的には23区内で開催されるもので、子どもと参加できるのかも分かればなお良い。(M.T.さん)

●上質な紙を使ってあって、とても落ち着いた冊子です。都内の自然の写真も多くて見やすいです。11月9日に日比谷図書館で入手したんですが第1号なんですね。都内の自然とりあげたら、わかりやすい行き方も今回のMAPみたいにつけておいてください。(J.E.さん)

●有料の雑誌並みの出来のよさだと思いました。無料なのを考慮すると個人で読み捨ては勿体ないため、役所、病院または郵便局の待合室に置いて

てもら、回覧板に添付する等により多くの都民に一読してもらう事を考えて頂きたいです。私は、今まで読む機会がありませんでした。ホームページが充実しているようなので、各自の「お気に入り」に入れてくれるように雑誌で大きくアピールするのも継続的な読者ができるので良いと思います。(R.S.さん)

●初めて興味深く拝見しました。近年大阪出身の方と話す機会が多かったのですが、東京は緑が多いことにびっくりしていました。歴史的に大名屋敷からはじまり、郊外の新田の多さ、街道の保全などが奏功していると思います。今後、ますますの都心の大規模開発で小規模な緑地が減ると思います。新たな緑地造成も大切ですが、歴史的にある、あるいは家庭(屋敷)の緑保全に留意すべきだと思います。本誌のそのような役割を期待します。(H.Y.さん)

●久しぶりに、自然と親しむことができるマガジンに出会って、とても嬉しかった。(M.H.さん)

●東京都内でも木や虫や鳥など、普段気付かないちょっとした所に、まだまだ自然がたくさん残っていることを再認識させられました。(E.I.さん)

●東京はコンクリートジャングルのイメージがある人も多いかもしれないが、緑もたくさんあることをこれからも積極的に発信して欲しいです！(T.S.さん)

●自然の中で農業体験をしたり、身近な自然を感じるエコツアーを楽しみたい。森林レンジャーの里山再生は人間にとっても動物たちにも必要です。公園でセミの羽化の観察会があることにびっくりしました。それにセミが羽化に失敗してしまって本当に大人になれず死んでしまったことに驚きました。自然は厳しい。自然保護や環境保全を大切にする人がたくさんいれば、世界は幸せです。未来の子どもたちのためにも自然を大切にしよう。TOKYOみどりマガジンの表紙のイラストがステキです。(K.N.さん)

●みどりマップは、他の場所のマップもほしい。行く気になります。東京近郊または真ん中に、こんなすてきなみどりがいっぱい。記事になった場所の住所は記載されていますが、交通アクセスマップがほしいです。(T.J.さん)

●意外なみどりを知ることができました。(H.K.さん)

●写真がきれいで、イラストも親しみやすいです。「公園で…」と「鳴く虫の…」の文章は臨場感にあふれていてすばらしいです。今後もこのような記事が続けてください。(N.I.さん)

なお「TOKYOみどりマガジンVol.1」は下記のサイトにPDF版を無料でダウンロードすることができます。読んでみたい！という人は、ぜひ下記サイトにアクセスしてみてください。

<http://all62.jp/magazine/enq.html>



【お詫びと訂正】

第1号「丸の内を楽しむエコツアー」の写真キャプションで正しくは「ハラビロカマキリ」とすべきところが「ハラビロカミキリ」になっていました。お詫びして訂正いたします。

TOKYOみどりマップ——②「東京の街中のみどり、緑地・公園のみどり」

TOKYOみどりマガジン Vol.1でもご紹介した身近な「みどり」、もう訪ねてみましたか？ ご好評につき、より詳しい地図付きで再びVol.2でもご紹介いたしましょう。まだ行っていない！という人は、ぜひ一度、気持ちいい天気の日足に足を運んでみませんか？

「マップづくりで自然を感じる」府中市の散策路

大國魂神社をはじめとする歴史的風土を残す社寺林や街道沿いの屋敷林、古きよき里地の姿を残す浅間山、そして多摩川や用水などの水と緑を緑道や遊歩道などでつなぎ、10コースの散策路が設定されています。各コースは約7～8キロと手頃な距離で、散歩気分楽しめます。取材では板橋区「緑のマップ・プロジェクト」のみなさんとマップづくりを楽しみました。なおウォーキングマップは市民相談室、市政情報センター、観光情報センター、郷土の森博物館、郷土の森観光物産館などにて1部100円で頒布しているほか、下記ホームページからもダウンロードできます。

●お問合せ先

水と緑のネットワークウォーキングマップ

〒183-0056 東京都府中市寿町1-5 府中駅北第2庁舎

府中市生活環境部 環境政策課

☎042-335-4315

<https://www.city.fuchu.tokyo.jp/kanko/walking/mizutomidoriu-xo-kingu.html>

緑のマップ・プロジェクト

〒174-0063 東京都板橋区前野町4-6-1

板橋区立エコポリスセンター3F
板橋区資源環境部 環境戦略担当課 環境協働推進担当係

☎03-5970-5656

http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/044/044598.html



「もっと気軽に農業体験」国立で農業体験

国立市の「くにたちはたけんぼ」では、四季折々に開催する農園祭などのイベントや、一年を通しての田作り観察・体験、グループでの畑作、農園マスター講座といった、さまざまな農と触れ合う機会を提供しています。市内の農家・NPO・市民団体・農業生産法人などで構成する「くにたち市民協働型農園の会」が運営しているので、どなたでも安心して参加できます。0歳から2歳までを対象とした「外遊び」のある子育て支援は「森のようちえん 谷保のそらっこ」へお問い合わせを。

●お問合せ先

くにたちはたけんぼ

〒186-8501 東京都国立市富士見台

2-47-1 国立市都市振興部 産業振興課

☎042-576-2111 (代表)

<http://kunitachi-agri.jp/hatakenbo/>

森のようちえん 谷保のそらっこ

〒186-0011 東京都国立市谷保4380-2

☎070-6458-0105

<https://www.facebook.com/yahosora>



「丸の内を楽しむエコツアー」千代田区界隈の散策路

巨大ビルが立ち並ぶ丸の内界隈にも、実はたくさんの自然が息づいています。近くの日比谷公園と結んで歩けば、立派なエコツアーが楽しめるおすすめスポット。NPO法人の生態教育センターによれば、昆虫だけで84種類、植物で170種、鳥は42種もいるという都心のオアシスなのです。「都心に棲む生き物」に興味がある人はぜひ一度、足を運



でみてください。

●お問合せ先

NPO法人 生態教育センター

〒189-0013 東京都東村山市栄町2-28-5 生態計画研究所内

☎042-390-0098

<http://www.wildlife.ne.jp/>

「公園でセミの羽化を観察する」三鷹市でセミの観察

都立野川公園は、調布、小金井、三鷹の3市にまたがる約40万平方メートルの敷地を持ち、多摩川が刻んだ「国分寺崖線」を背景に、崖線から湧き出る水がつくる水辺、雑木林、草原と変化に富む環境のなかで、野草や鳥、昆虫など四季折々に楽しむことができます。公園では自然観察会などさまざまなイベントが開催されています。園内のサービスセンターや自然観察センターでは、セミ、バッタ、季節の花など約20種類の『レンジャーミニ図鑑』を備え、より深く生き物について学ぶことができるよう、季節に応じて来園者に提供しています。セミの羽化観察会は、小学生が対象。夜の公園で、保護者とともに神秘的なセミの羽化を楽しめる人気の講座です。

●お問合せ先

都立野川公園 野川公園サービスセンター

〒181-0015 三鷹市大沢6-4-1

☎0422-31-6457

<http://musashinoparks.com/kouen/nogawa/>



「鳴く虫の女王カンタンを聴く」葛飾区で昆虫観察

葛飾区では、区内のさまざまな自然環境や動植物を知り、生物多様性保全について理解を深めることを目的に活動をしています。水元公園や青戸平和公園、新小岩公園、西亀有せせらぎ公園などを舞台に季節ごとに自然観察会や自然学習講座を実施。春は植物観察、夏はセミの羽化、秋の鳴く虫カンタンを聴く会など、自然に親しみきっかけづくりを行っています。「カンタンの里」は地図中5カ所の公園内の一角にあります。

●お問合せ先

カンタンの里

〒124-8555 東京都葛飾区立石5-13-1

葛飾区環境部 環境課 自然環境係

☎03-5654-8237 または 03-3695-1111

(内線3522)

<http://www.city.katsushika.lg.jp/cgi-bins/event>



「森林レンジャーの里山再生」あきる野市で里山と触れ合う

「森林レンジャーあきる野」とは、あきる野市が取り組んでいる郷土の森づくりを、より具体的に進めるための専門集団。地域の方々の森に対する夢



オール東京62市区町村共同事業

「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」とは？

「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」は、東京で暮らす私たちにとって大きな課題である温室効果ガスの削減やみどりの保全について、東京都内の全62市区町村が連携・共同して取り組む事業です。

平成26年度 「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」の取り組み概要

普及・啓発物品の作成・配布

本プロジェクトの普及・地球温暖化防止を図るため、グリーンカーテン用のタネ(ゴーヤ)を各市区町村に配布しました。

温室効果ガス標準算定手法の共有化推進

「62市区町村共通版温室効果ガス標準算定手法」により、62市区町村すべての温室効果ガス排出量を算定し、公表しています。

助成金交付

市区町村が実施する自然環境保護、地球温暖化防止対策事業に対して、各団体150万円を上限とする助成金を交付しました。

エコプロダクツ2014への出展

平成24、25年度に引き続き、国内最大級の環境展示会「エコプロダクツ」に出展し、当プロジェクト事業および市区町村の実施している環境施策を発表しました。



再生可能エネルギーとスマートコミュニティ研究

基礎自治体におけるスマートコミュニティ導入の可能性について、実践的な研究を進めるとともに、各自治体の施策化・事業化を支援しました。

「みどり東京フォトコンテスト」の実施

写真を撮影することを通じて、身近にある東京のみどり・自然の美しさを広く都民に再評価していただくとともに、みどりの保全に関する意識の向上を図ることを目的としています。今年度は2000を超える応募がありました。



グランプリ「みどりを囲んで」(受賞者:宮森義雄、撮影地:立川市昭和記念公園)

「TOKYOみどりマガジン」アンケート

*FAX、メール、サイト、郵送にてご送付ください。

1)この冊子をどこで受け取りましたか？

- ☐ 役所(役場)の窓口
☐ 都営地下鉄のラック:()駅
☐ 都立公園ビジターセンター:()公園
☐ その他:()

2)おもしろかった記事、気に入ったページに✓をつけて下さい。(3つまで選択可)

- ☐ 巻頭インタビュー
 特集3
☐ 緑のカーテンを育てる
☐ プールのヤゴ救出大作戦
☐ 学校ビオトープで生き物に親しむ
 特集4
☐ 里山でボランティア体験
☐ 薪をつくって森を守る
☐ 屋上緑化で創られた天空庭園

☐ その他()

3)「TOKYOみどりマガジン」の感想とメッセージ(自由にお書きください)

●アンケート送付先

一般財団法人 環境イノベーション情報機構内
 TOKYOみどりマガジン編集部
 〒105-0013 東京都港区浜松町1-10-11 浜松町OSビル10階
 FAX 03-6695-1259 TEL 03-6695-1263
 e-mail: tokyomidori@all62.jp
 http://all62.jp/magazine/enq.html

ホームページ運営

62市区町村の連携をさらに深めるため、事業や活動の紹介など、関係情報の充実を図っています。また、「エコニュース」「エコアカデミー」などのコンテンツの充実により、当プロジェクトの普及・啓発に努めています。

ECOネット東京62ホームページ <http://all62.jp/>

みどり東京

検索

主催/特別区長会 東京都市長会 東京都町村会 企画運営/公益財団法人特別区協議会 公益財団法人東京市町村自治調査会

千代田区/中央区/港区/新宿区/文京区/台東区/墨田区/江東区/品川区/目黒区/大田区/世田谷区/渋谷区/中野区/杉並区/豊島区/北区/荒川区/板橋区/練馬区/足立区/葛飾区/江戸川区/八王子市/立川市/武蔵野市/三鷹市/青梅市/府中市/昭島市/調布市/町田市/小金井市/小平市/日野市/東村山市/国分寺市/国立市/福生市/狛江市/東大和市/清瀬市/東久留米市/武蔵村山市/多摩市/稲城市/羽村市/あきる野市/西東京市/瑞穂町/日の出町/檜原村/奥多摩町/大島町/利島村/新島村/神津島村/三宅村/御蔵島村/八丈町/青ヶ島村/小笠原村

※この事業は、公益財団法人東京都区市町村振興協会からの助成金により実施しています。

「TOKYOみどりマガジン」 Vol.2
 2015年3月10日発行

発行: オール東京62市区町村共同事業「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」
 企画・制作: 一般財団法人環境イノベーション情報機構
 編集: クリエイトブックス デザイン: 松澤政昭

